

1、松本城抜け穴伝説

松本城ぬけ穴伝説

松本城天守1階には、周囲が約2m四方、深さ約1m、スッポリと口を開けたくぼみがあります。この四角い穴は、天守の内と外を結ぶぬけ穴の入口ではないかといわれてきました。1817(文化14)年に許されて天守に登った武士は、この1階のくぼみは「いろり」であると、記しています。



昭和の大修理の時に、実際にぬけ穴があるのかどうかを調査しました。その結果、ぬけ穴は見つかりませんでした。天守台の中の支持柱がくさってあとが穴になっていたのです。ぬけ穴伝説は、そこから生まれたのではないかと思います。本丸から内堀・外堀・総堀の下を通して、城の外までぬけ穴をほることは、湧水地帯にある松本城では不可能なことでした。

松本城の抜け穴伝説は、昭和25年からの解体復元工事の中で、土台支持柱が腐ってしまったあとの穴ということが明らかとなり。残念ながら抜け穴伝説のロマンは消え去ってしまいました。松本城の立地条件からみても、湿地地帯であること、内堀・外堀・総堀の三重の堀の下を越えて城山に到達するという工事は、当時の優れた土木工事を持ってしても至難のわざです。

天守は、領主の力を示すシンボルとしてあることはよくいわれているところである。また、もし戦いが始まり、敵兵に囲まれ、城主を始め多くの武士と一緒に戦うために籠城(ろうじょう：たてこもるの意)する時のものでもあるともいわれている。本城が敵の手に落ちた時には、城主は城と共に討ち死にするか、切腹するのが武士の美德とされていた。しかし、奥方や子どもは、抜け穴から城外へと落ちのがれて、家名を存続(子孫の継続)することを願う。このために抜け穴伝説が、松本城以外の多くの城にも伝わっているのではないかとされる。

2、小笠原牡丹

5月ごろ本丸見櫓の下にある牡丹園に、ひときわ艶やかに純白の牡丹の花が咲きます。この「白牡丹」は「小笠原牡丹」と呼ばれるようになりました。この牡丹には、次のような物語があります。

(物語)



『小笠原氏は鎌倉時代末頃より守護大名として中濃を支配していました。戦国の世となり、天文19年(1550)甲斐(山梨県)を發した武田晴信(信玄)は、中濃守護小笠原長時の居城林城を攻めました。小笠原氏はわずかな抵抗を試みたのみで林本城を捨て、鎌倉時代から治めていた中濃の領地を失ってしまいました。

林城を捨てることを決めた長時は、大切に育て続けてきた白い花を咲かせている牡丹が敵兵に踏みにじられることを悲しく思い、何としても戦乱から守らねばと祈願寺であった里山辺兎川寺の住職に牡丹の数株を託すことを考えました。長時は、戦陣のあわただしさ



の中で住職を招き、自分の思いを述べ牡丹を守り続けてほしいと懇

請しました。住職は、快く牡丹を末長く守って子孫に伝えることを約束し、兎川寺の庭に移して大切に育ててきました。

こうした大切な牡丹を一箇所で育て、万一絶やしてしまうことを恐れた住職は、檀徒総代の久根下家と相談し、株分けをしてお互いに育てることにしました。後には、兎川寺の牡丹は途中絶えてしまいましたが、久根下家の株分けされた牡丹は「殿様の白牡丹」として、門外不出を守り続け、誰の手に渡ることもなく絶やすことなく、四百余年の間先祖代々大切に育てられてきました。

数百年の年月を経て、昭和32年11月に長時から数えて16代目に当る、故小笠原忠統氏のもとに返されました。忠統氏は先祖が居城した松本城の庭に、この花が毎年咲くことを希望され、今の場所に移植されたとい

います。これを機に「小笠原牡丹」と呼ばれるようになったのです。』

その後平成18年10月にも4株寄贈していただき、牡丹園に植えました。

今でも松本市里山辺久根下家では、前庭に四十~五十株の白牡丹が大切に育てられ、毎年五月には純白の大輪をつけ、清らかに咲き誇り、戦国の古を私たちに問いかけているようでもあります。

